

学校の「全制的施設化」について

今津孝次郎（名古屋大学）

1. 問題

「全制的施設 total institution」(Goffman, 1961)の観点から学校組織を把握する議論は、これまで内外で提起されてきたが、それらは一般に両者の類似性を指摘するに止まっていた。本発表では、そこからさらに一步踏み込んで、学校の「全制的施設化」という概念を新たに提案し、1970年代以降の学校批判論を考慮しながら、登校拒否やいじめなど種々の教育問題を生み出す現代日本の学校組織を把握し直すための原理的な基本枠組みについて検討したい。

2. 「全制的施設」と学校

全制的施設とは「多数の類似の境遇にある個々人が、一緒に、相当期間にわたって包括社会から遮断されて、閉鎖的に形式的に管理された日常生活を送る居住と仕事の場所」(Goffman, 1961, 邦訳V頁)であり、具体的には、刑務所・強制収容所・兵営・精神病院・矯正施設・修道院・寄宿学校などがあげられる。

この全制的施設の観点から学校について本格的に論じたのが、Webb & Sherman(1989, chap. 11)である。彼らは、全制的施設を官僚制機構の特殊形態と捉え、1960年代以降に学校教育の規模が拡大するなかで、官僚制組織として発展を遂げた学校は全制的施設としての性格を多分に持つと論じた。

ただし、その議論は施設形態や施設内生活といった客観的側面に注目して全制的施設の特徴が学校にも当てはまると指摘したものであって、学校内の生徒の主観的側面にまで立ち入ったものではなかった。これに対して、Goffmanがもっとも関心を寄せたのは、全制的施設での被収容者の主観的な世界であり、とりわけ彼らが抱く「自己の無力化 mortified」という問題であった。学校と全制的施設の類似については、客観的側面とともに、生徒の主観的側面にも目を向けて考察する必要がある。

この主観的側面に注目して論じたのは、早くから学校と全制的施設の類似性に言及した Illich や、小学校教師の

経験も持つ Holt である。

Illichは「学校は制度スペクトル上の右端にある全制的施設(total asylum)の近くにある。学校は人々に自らの力で成長することに対する責任を放棄させることによって、多くの人々に一種の精神的自殺をさせるのである」と述べた(Illich, 1971, 邦訳 116-117頁)。またHoltは「強制収容所パーソナリティー camp personality」を念頭に置きつつ、学校内での落ちこぼれ生徒たちの態度を次のように分析した。強制収容所では、自分たちの命と人間としての尊厳を守り、どうしようもない無力さのなかで監視者たちの強要に抵抗するため、囚人たちは親愛なる間抜けさ、笑顔を絶やさない愚かさ、協力的・積極的な無能さ、といった態度をとるといふ。それほど効果がないようにみえるこうした抵抗も、実は自分たちの高潔さを保つための術なのである。そうした視点から学校内の生徒たちを眺めるとどうなるか—「学校とは牢獄の一種にすぎない。子どもたちは自分たちの精神の、最も知的で創造的な部分を、学校という場面から引き上げることで、容赦のない、情けしらずのプレッシャーから一定程度であれ、逃れ、身をかかわっているのではないのか?…『分からない』とテコでも動かない頑固さで答えること—それは…ひとつの抵抗の表明ということにはならないだろうか」(Holt, 1969, 邦訳 147頁)

3. “管理教育”の再検討

「学校とは牢獄の一種にすぎない」というメタファーは、日本の学校についてもしばしば語られてきたが、特に頻繁に使われるのは、登校拒否が話題になったときである。たとえば、小学校5年生のときから登校拒否に陥っている17歳の男子は次のように語る。「教室のなかにいると、窒息しそうな感じがする。ほとんど発狂しそうな感じで、叫びたくなくて外にでたくなるんです。休み時間でも、授業中でも、給食のときでも、それが襲ってきて、それを間一髪のところまで耐えてきたんです。牢獄に閉じ込められ、自分がぜんぶ否定されている感じなんです。…登校拒否を

するまえの何か月間か、そういう気持ちがつねにありました」(渡辺 位, 1983, 35頁)

「自分がぜんぶ否定されている感じ」というのは、「自己の無力化」(Goffman)や「自らの力で成長することに対する責任を放棄させる」(Illich)ことと相等しい。

そこで、1980年代以降に批判的となった日本の学校の「管理(主義)教育」の意味を改めて考えてみると、それは私的領域を侵犯し、行為の自律性を侵犯すると感じられるような統制を伴う学校教育のありかたであると説明することができる。つまり、「管理教育」の問題性は、細かすぎる規則や体罰の行使といった表面的で具体的な管理方法そのものよりも、むしろそれらを生み出す「身体の統制」ないし「全制」という学校活動の基本特徴と、そうした場では統制が生徒のパーソナリティの深くまで及び、「自己の無力化」が引き起こされるという点にある。

もちろん、被收容者が無力化に抗して自己を確保しようと積極的または消極的戦略を用いるように(Goffman, 1961, 邦訳 63-67頁)、学校でも生徒はさまざまな適応を果たそうとする。たとえば、①〈転向〉としての、「良い生徒」になること。②〈状況からの引き籠もり〉としての、無気力または登校拒否。③〈集団的擲論〉としての、教師に対するクラスの悪戯。④〈取引〉としての、教師の顔を見て反応すること、などなど。

4. 学校の「全制的施設化」

以上のように、客観的側面だけでなく、主観的側面に関しても、官僚制化された学校は全制的施設と類似性が高いといえる。しかし、学校は全制的施設である、と言い切ってしまうには問題がある。したがって、学校組織制度全体の性格づけではなくて、個々の学校における組織活動の様態を把握する概念として、全制的施設の性格を一つの尺度として用いたほうが、実際の学校分析や学校改革に向けての取り組みに役立つと考えられる。そして、強力に「全制的施設化」された様態が「管理教育」であるならば、個々の学校の「管理教育」がどの程度のものであるか、という把握も可能になるだろう。

そこで、「全制的施設化」の尺度を考えてみたい。図1に掲げたように、全制的施設としての特徴を完備した状態をZ極とすると、対極のXはそうした特徴をいっさい持た

ない非全制的施設の状態である。Z極の特性は「抑圧性」「閉鎖性」「規則主義」「自己の無力化」であり、X極の特性は「自由性」「開放性」「非規則主義」「自己の発現」である。Z極に向かえば「全制的施設化」が強くなり、X極に向かえば「全制的施設化」が弱くなるという構成軸である。そして、実際の学校はZでもXでもなく、両極間のYのどこかに位置し、ZとXの間を揺れ動くものとして考えることができる。

Y軸上の揺れ動きについては、各学校が置かれたさまざまな条件によって影響を受け、「全制的施設化」の程度は学校によって異なってくるであろう。

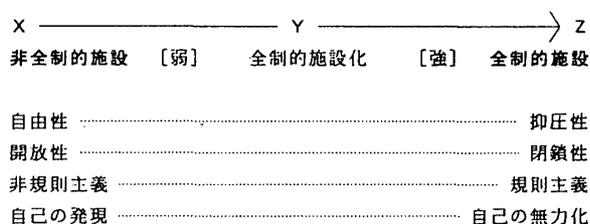


図1 全制的施設化

【参考文献】

- Goffman, E. (1961) On the Characteristics of Total Institutions, in *Asylums*, Doubleday & Co. 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房, 1984年.
- Holt, J. (1969) *How Children Fail*, Perican Book. 大沼安史訳『教室の戦略—子どもたちはどうして落ちこぼれるか—』一光社, 1987年(1982年原書改訂版による).
- Illich, I. (1971) *Deschooling Society*, Harper & Row. 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社, 1977年.
- 今津孝次郎(1995)『「かたい学校」「やわらかい学校」と教師教育の諸問題』名古屋大学教育社会学研究室.
- 渡辺 位編著(1983)『登校拒否・学校に行かないで生きる』太郎次郎社.
- Webb, Rodman B. & Sherman, Robert R. (1989) *Schooling and Society*, 2nd ed., Macmillan.